

# INDEX

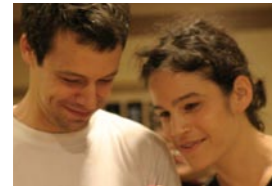
Saitama Arts Theater Press NO.11 Sep.- Oct.



03 ESSAY

## 金原ひとみ

全ては妄想と申す、ひとみの目に涙。



04 DANCE

国際共同製作 インバル・ピント・カンパニー  
新作 2007 (世界初演)

## インバル・ピント × アヴシャロム・ポラック

「壊れた魂」「壊れた形」に乞われて。



07 DANCE

## 井手茂太 × 康本雅子

日本昔々の話っぱなし、踊りっぱなし。



08 TALK

## 宇崎竜童 × 蜷川幸雄

千の目万別、竜童的に舌戦過激な歌と劇。



10 PLAY

## 蜷川幸雄

リア王の顔も四度。リアイズムの集大成へ。



12 PLAY

## 藤原竜也

10年目の身毒丸、ますます凛々しく舞台に竜也。



13 PLAY

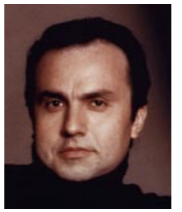
## 松本雄吉

以心伝心、維新派の威信をかけたノスタルジア。

## 14 MUSIC 彩の国シーズン・ ラインアップ

2007/2008 全18公演

季節を問わないクラシックのシーズン来る。



© Kazuo Matsuura © Marco Borggreve



© Steffen Jänicke © Vincent Garnier

## 20 EVENT CALENDER & TICKET INFORMATION

イベント・カレンダー 2007.9.15-11.30  
前売りチケット発売情報 (~ 11.15) 発売中公演情報

## 23 THEATER BRIDGE

公演レビュー、募集など劇場からのご案内

## 24 Artist Diary

テルアビブの朝のピントたちのピントした気持ち。

表紙「インバル・ピント・カンパニー」  
PHOTO:Eyal Landesman ILLUSTRATION:Inbal Pinto & Avshalom Pollak  
編集:横山雅美 デザイン:ATAMATOTE International INDEXコピー: BASON  
© (財)埼玉芸術文化振興財団  
Published on 15. SEPTEMBER 2007 All Rights Reserved by Saitama Arts Foundation

「原作」ガルシアマルケス 「脚本」坂手洋一 「演出」蜷川幸雄 「音楽」マイケル・ナイマン  
「出演」中川晃教 美波 園村華 蓮川哲朗ほか 8月9日公演 9月2日・6日 全7公演



スベクタクフル・オペラ  
見世物祝祭劇『エレンディラ』 8月9日公演より

## 金原ひとみ

劇の始め、祖母の世話をしているエレンディラを見て、母に対して何の力も持たなかった幼い自分を思い出した。母に利用されながら生きていた子どもの頃の自分を思い出し、母の近くにいたら自分は殺されるという危機感に苛まれた自分を思い出し、母の元を逃げだしてもなお母の亡霊に取り憑かれている今の自分を思い出し、身震いした。ウリセスが祖母を殺し、それを見ていたエレンディラが走って逃げ出すシーンから涙が止まらなくなった。自分のために人を殺した愛する人を置いて逃げ出す気持ち、何故か痛いほど身に染みて、終演まで泣き続けていた。

舞台はエレンディラが逃げ出してから数十年後の、海辺で終わる。ウリセスは実際には駝鳥であり、エレンディラの妄想だったと分かる。そして、実はまだ生きていたエレンディラは、祖母の姿となっている。帰りの電車を待つ途中、鏡で赤い目を覗き込みながら思った。全ての男は妄想だ。全ての母は妄想だ。そしてウリセスが妄想だったのなら、祖母も妄想だったのではなからうか。一人の娼婦が、生きるために必死に、壮大な妄想を作り上げたのではなからうか。この世に生きる全ての人は、生きるために世界を変える。どうしたらいいのかわからない誰か助けて。そう思った時、必ず助けはやって来る。私もきっと、自分の中の何者かに母を殺させ続け、ここまで生き延びたのだろう。しかし私に母がいた事なんて、一度でもあったらだろうか。そして私もいつか、あの祖母に、母に、変身していくのだろうか。あるいはもう既に、私は母なのだろうか。

金原ひとみ◎1983年(昭和58年)8月8日生。東京都出身。  
著書『蛇にピアス』『アッシュベビー』『AMERICAN』『オートフィクション』『ハイドラ』